

清水郁太郎

しみず・いくたろう

医学者、東京大学教授

経歴

生: 安政4年(1857年)10月13日、備後国深津郡吉津村(現:広島県福山市北吉津町)生まれ

没: 明治18年(1885年)2月26日、享年29歳、福山法真寺および東京谷中霊園に葬る

—	—	福山藩鍼医で伯父の清水宗橘の養嗣子となる
明治3年(1870年)	12歳	藩校誠之館に入学し、漢学、蘭学を修める
明治4年(1871年)1月	13歳	東京に游学、司馬凌海の春風社に入って独語を学ぶ
明治4年(1871年)3月	13歳	大学南校で独語を専攻
明治5年(1872年)10月	15歳	文部省官費生徒に選ばれ、「第一大学区医学校」予科に転入
明治11年(1878年)11月	21歳	「東京大学医学部」本科卒業(第1回生)
明治12年(1879年)12月20日	22歳	留学のためドイツへ向けて横浜を出発
明治13年(1880年)1月8日	22歳	ベルリンのブリドリヒ、ウイルヘルム大学校において就学
明治14年(1881年)5月	23歳	オーストリアのウィーン大学校において就学
明治14年(1881年)9月	23歳	オーストリアのザルツブルグドイツ・オーストリア学士会会員となる
明治16年(1883年)1月25日	25歳	東京へ戻る
明治16年(1883年)3月24日	25歳	文部省御用掛準奏任、東京大学医学部講師
明治16年(1883年)夏学期	25歳	婦人科外来臨床講義
明治17年(1884年)6月19日	26歳	東京大学数授(産婦人科担当)
明治17年(1884年)7月2日	26歳	正七位
明治17年(1884年)11月	27歳	往診の課を設ける

生い立ちと学業、業績

近代医学草創期の明治医学界にあって、独逸流産婦人科学の導入に大きな功績をあげ、邦人としてはじめて東大教授に任命されたのが、福山誠之館出身の清水郁太郎氏であった。氏は、安政4年(1857年)10月13日、福山藩士清水宗七の嫡子として吉津村(現:福山市北吉津町)に生まれた。清水家では男1人であったが、幼くして伯父福山藩鍼医清水宗橘の養嗣

子となった。

慶応初年誠之館に入学、はやくからその穎才(えいさい)を認められ、明治4年(1871年)、選抜されて藩費をもって東京に遊学することとなった(15歳)。ちなみに、その前年明治3年(1870年)には、「大学規則」による「貢進生」制度が実施され、全国各藩から、それぞれ1~3人の俊才を大学に派遣することになり、福山藩からは、武田安之助(のち「尋常中学福山誠之館長」と山岡義五郎(のち税務事務官)の2名が選ばれ、明治3年(1870年)10月に入学している。貢進生には16才から20才までという年齢制限があったから、氏がこれに選ばれることは不可能であった。上京後は、語学の天才といわれた司馬凌海(当時大学東校少博士)の春風社に入って独語を学び、ついで大学南校でも独語を専攻して、明治5年(1872年)10月文部省官費生徒に選ばれた。この明治5年(1872年)8月の「学制」頒布によって、これまでの「大学東校」は「第一大学区医学校」と改称されており、彼はその予科に転入した。この学校は、明治7年(1874年)に「東京医学校」となり、明治10年(1877年)4月には、「東京大学医学部」として新発足したが、氏は医学本科第1回生となった。すでに医学校時代から、ミュルレル(A.Muller)制定の新教育課程で修学していた清水らは、明治11年(1878年)11月、医学部本科第1期生として卒業した(22歳)。

この時文部省は、卒業生のうち抜群最上等生徒を官費(貸費)留学生として直接ドイツの大学に留学させ、将来備外人教授に代らせることを企図した。これに応じ、きびしい審査に合格したのが、清水ほか2名であり、明治12年(1879年)11月正式に許可があつて、11月20日横浜港から渡欧した。清水は、ベルリン大学、ウィーン大学において、当時もっとも高名な多くの教授のもとで単に産婦人科学だけでなく、医学各科の基礎・臨床の学習にはげみ、留学3年、その目的を十分に満たすに足る成果を抱いて、明治16年(1883年)1月帰朝した。

直ちに教室復帰した氏は、その年の夏学期から、外人教授に代わって婦人科外来臨床講義にあたり、翌明治17年(1884年)6月19日付で、邦人として最初の東大教授(産婦人科担当)に任ぜられた(28歳)。当時なお漢方医学の影響が強かった産婦人科にあつて、学問体系・臨床診療のみならず、病棟管理・教室運営の面にまで、ドイツ流新体制が展開されはじめた矢先、在職わずか8カ月にして、明治18年(1885年)2月26日、惜しくも病いに倒れた(29歳)。

福山市吉津町法真寺および東京谷中霊園に葬られている。

(『東京大学百年史(通史一)』、『広島県医人伝』江川義雄著、『福山医学散歩』岩崎博著)
(出典2)

「清水郁太郎伝」

富士川游 著

先生は旧備後福山の藩士なり父の名は宗七母は三島氏一姉一妹あり姉は同藩士上村義一郎に嫁し妹は家を承く先生幼にして伯父清水宗橋に養はる宗橋は福山藩の鍼医なり先生竟(ついに)其の子となる天資温厚事に処して善く断じ忍耐不撓夙(つと)に英敏を以て称せられ人

皆望を囑す漢学を福山の紳商近藤一次、松岡泰蔵等に学び一二歳にして藩校誠之館に入り漢学及蘭学を修め嶄然(ざんぜん)頭角を現はす明治四年正月藩主先生を諸生の中に撰み藩費を以て東京に出し医学を修めしむ先生即ち笈を負ひ東京に來り大学小博士司馬盈之の家塾に入り独逸語学を修め三月大学南校独逸学教室に入り益々独語に通ず五年十月文部省官費生となり常に級首に位せり幾なくして大学東校に轉じ初めて医学の緒に就き其四かり本科に移り十一年十一月全医学を卒業す修学中常に強記を以て衆に冠たり十二年三月十日より同六月十日に至るまで卒業諮問の対応し及第して同年十月十八日第一号卒業証を受け医学士の号称を得たり同年八月七日医学部の傭となり一ヶ月金二十円を給ひ医院に出勤し外科当直医となる同十月三十一日依願雇を免ぜらる次いで文部省先生を拔擢して独逸国官費留学生と為す名声愈愈聞ふ先生蒼皇(そうこう)旅装を整へ十二月二〇日を以て横浜を解纜し路を印度洋に取り四十余日にして欧州に達し十三年一月一日佛国巴里府に至り滞在三日去て独逸ストラスブルグに達し滞留二日(四日五日)十三年一月七日を以て伯林府に着して学事に就く明治十五年十二月十日期満ち同十四日を以て伯林府を發し復た印度洋を経て十六年一月二四日横浜に着し二五日東京に歸る前に東京を發するより此日に至るまで実に三年二ヶ月余なり先生の欧州に在るや明治十三年一月八日独逸国(ドイツ)伯林府(ベルリン)ブリドリヒ、ウイヘルム大学校に入り教授シュリーテル氏グッセロー氏マルチン氏に従いて同年三月二五日に至るまで産科臨床講義、産科婦人科臨床講及外来診察、婦人科診断演習、産科学説を研修し同年四月十六日より八月十五日に至るまで教授グッセロー氏ルンゲ氏バルデレーベン氏に従い産科手術演習、初生児病論を研究し且ツマルチン氏の助手となりて外科臨床講義を聴き又実地を演習し同年十一月一日より十四年四月一日に至るまで教授ムンク氏に動物及び人体生育論の講義を受け且ツマルチン氏の助手となりて婦人科学説及び実地を学び十四年六月初旬学識拡張の爲め奥地利国(オーストリア)維也納府(ウィーン)大学校に轉じ八月十五日に至るまで教授ブラウンスパー氏バンドル氏センク氏ウルツマン氏フリージングル氏シャウター氏に従ひて産科臨床講義、産科婦人科臨床講義、婦人科外来診察、胎生学、泌尿器学学説及臨床講義、種痘学説及実地、初生児病論、乳母病論、産科手術演習を修め同年九月奥国ザルツブルグ独逸学士会に到り其會員となる同年十月十日より十五年四月一日に至るまでスハート氏ウィーデルホーヘル氏ノイマン氏ミクリッツ氏ハイデル氏センク氏シャッケルカンテル氏ロット氏に従ひ産科婦人科臨床講義、小児科臨床講義、皮膚病梅毒臨床講義、外来診察、外科手術演習、内科診断法、胎生学実地検査、生殖器局所解剖、婦人科手術演習を研修し同十五年五月維也納府より伯林府外科医会に臨席す同年六月一日再び独逸国伯林府大学校に歸りシリュエデル氏ランゲンベック氏マルチン氏クラウロック氏に従ひて同年十二月二十五日に至るまで産科臨床講義及び院外応招診察、外科臨床講義、婦人科外来診察、病体顕微鏡検査を研究す抑も先生の研究中におけるや精勵屈せず前後一日の如し而してマルチン氏の助手たるを氏に請ふて曰く余未だ理論の蘊蓄を究むる能はざれども手術に因て其技を練熟せしめんとほつす敢えて願ふ専ら驚才を尽くして実験の事に従はしめよ氏喜んで而之を諾し応召診察の事周旋せり於是先生寒夜昼夜を顧みず路の遠近を厭わず提囊徒歩病婦の招きに応じ只管多く実地に接するを務め人の厭う所も先生は決して之を辞せず勇進敢為頗る欧人を驚かすマルチン氏大いに其志を賞し先生の維也納府(ウィーン)に赴くに臨み告別の序を草し以て先生に授く其書に曰く

日本派出の医学士清水君は一千八百八十年一月の始めに於て吾が助手の伴侶に入り今益其学業を拡張せんと欲して此伴侶を退出す別に臨み左の數件を敢言し得るは予の大に満

足する所なり学士清水君は此十五月豪も倦まず勉強して予に従ひ吾が講義を聴取し此月日予が施せし各種の手術を補佐して一大多数の患者に就き実地を演習する機会を得たり加之予が誘導に由て屢自から婦人科手術を施したり其勉強及び活発なる注意は予を勧喜せしめ其患者を待遇するの懇篤は患者を感佩(かんぱい)せしめたり而して其精励及篤学の精神は実に予をして向來の大成を予期せしめ予が敬愛の情を惹出す請ふ千万自愛せよ

千八百八十一年四月一日

独逸国(ドイツ)伯林府(ベルリン)大学校教授
ドクトル、アウグスト、マルチン

既に而先生の帰朝するや官早く既に先生を抜き明治一六年三月二十四日を以て文部省御用掛準奏任となし年俸千二百円を下賜し医学部に勤務し講師となりて医学部本科生に産科婦人科学及び二科の臨床講義を授け且つ産婦人科外来患者を診治せしむ諸生咸(み)な先生の学問通博にして授業の懇篤なるに心服す明治一七年六月一九日東京大学教授に任ぜられ同年七月二日正七位に叙せらる偶官寄宿舎を廃し其一部を産婦人科教場及び病室とし君に命じて之を主らしむ蓋(けだ)し先生が明治十六年六月建言したる所に基つくなり先生又建言して一七年十一月に往診の課を設け生徒をして実地に接するの機会に富ましめたり尚ほ繼て産婆教育課を設けんとし其他計画の腹按一にゞ足らざりしに明治十七年一二月末突然急性肺癆を發し明治十八年一月二日熱海に赴き療養するも効を奏せず二月二六日衰弱を以て没す先生品行方正精神活発なるも資質甚だ壮健ならず而して其業を執る太た力む諸友常に先生を戒めて其或は時に休養せんことを勸先生答えて曰く道のために死するなり死も亦何ぞ辞せんと勉強素の如く終に長逝の客となれり痛恨実に先生安政四年十一月十一日を以て広島県深津郡福山古吉津町に生し享年二十有九東京谷中天王寺に埋葬す配伴氏子なし父母及び養母既に没し唯た一老養父の存するのみ後妹の長男淳太郎其跡を嗣げり

この編は東京医事新誌三百六十四号所載の伝記に小林義直先生の添削を仰ぎたるもの又肖像は清水先生が奥国(オーストリア)維也納府(ウィーン)より小林先生に贈られたるものにして小林先生より特に貸与されたるものなり、謹んで厚意を謝す (出典3)

出典1:『芸備医志』、35頁、芸備医学会刊、昭和10年12月15日 【復刻版=広島県医師会刊、昭和48年11月11日】

出典2:『誠之館百三十年史(上巻)』、209頁、福山誠之館同窓会編刊、昭和63年12月1日

出典3:『芸備医事』、「清水郁太郎伝」、富士川游、明治31年7月

出典4:『広島県人名辞典 芸備先哲伝』、260頁、大正13年12月

出典5:『東京大学百年史 通史一』、515頁

出典6:『広島県の医師群像—明治時代—』、42頁、阪田泰正著、安芸津記念病院郷土史料室刊、昭和61年1月1日

出典7:『広島県醫人傳(第1集)』、34頁、「清水郁太郎」、江川義雄編刊、昭和61年4月19日

関連情報1:『誠之館同窓会会報(第8号)』、10頁、「谷中霊園に眠る二人の小林義直と清水郁太郎」、園尾裕、福山誠之館同窓会編刊、2001年5月1日

関連情報2:『誠之館同窓会会報(第9号)』、4頁、「東京大学産婦人科室 初代日本人教授 清水郁太郎」、園尾裕、福山誠之館同窓会編刊、2002年5月1日

2005年4月13日更新:経歴・本文●2005年4月14日更新:出典●2006年4月28日更新:タイトル●2007年8月2日更新:
経歴・本文●2008年1月7日更新:経歴●2009年9月10日更新:出典●2009年9月18日更新:経歴・出典●2009年10月
19日更新:出典●2012年2月13日更新:経歴・本文・出典●